

- (10) 中川正美『源氏物語と音楽』（和泉選書、一九九一年）参照。同著は音楽に於ける「合はせ」という語彙にも注目する。
- (11) 「聞こえかよふ」は、「聞こゆ」（「言ふ」また音が聞こえるとの両意をかさねる）という行為・動作が、相手に至りとどく。音信を通ず」の意であるという（北山谿太『源氏物語辞典』・「いひかよふ」の項。同書は「きこえかよふ」を「いひかよふ」の謙讓語と捉える）。語りの仕組みから見てもこの「かよひ」は、光源氏の思いを主に読み取るべきであろう。
- (12) この語については、山本利達「おほけなき心」考（『奈良大学紀要』25、一九九七年三月）に研究史を踏まえた総体的な解釈がある。
- (13) 『資治通鑑』原文は、「或与貴妃对食、或通宵不_レ出。頗有醜声_二聞_一於外。上亦不_レ疑也」とある（天寶十載正月、中華書局版）。
- (14) 山本利達前掲論文。また陣野英則「紅葉賀」巻における不分明な「御心の中」（『人物で読む源氏物語』第四巻——藤壺の宮』勉誠出版、二〇〇五年）参照。
- (15) 堀淳一「後白河院五十賀における舞楽青海波——『玉葉』の視線から——」（『古代中世文学論考』三、一九九九年一〇月）、また三田村雅子氏の一連の論考（『青海波再演——「記憶」の中の源氏物語——』『源氏研究』五、二〇〇〇年、「記憶」の中の源氏物語」（5）〜（8）『新潮』第百一第十一号〜百二卷第二号、二〇〇四年十一月〜二〇〇五年二月）など参照。なお、本稿の礎稿となった口頭発表では、この「源氏物語」の史実化をめぐる問題をもう一つの柱としたが、その部分については、再構成の上、後日の別稿を期したい。
- (16) このあたりについても、注（2）所掲の拙稿参照。
- (17) 「廻雪」とは舞踏の表現に用いられる比喩的表現で、「緩やかな、或いは細かな動きを伴った旋回運動によって舞衣の袖や裾が揺れることをい」い、「白居易の舞踏表現で旋転運動を描写するときの常套語」と山本敏雄氏は論じている（前掲論文）。「胡旋舞」する女の姿は、紫劍虹「胡旋舞散論」（『西域文史論稿』所収、台北・國文天地雜誌社刊、一九九一年、初出一九八一年）及び森安前掲書に領中を振る演舞の絵が載っている。
- (18) 安祿山と光源氏を比定するときに生じる「ノイズ」の問題については、前掲拙著『日本文学 二重の顔』第二章参照。
- (19) 桐壺巻における『長恨歌』の依拠の空白については、注（2）所掲の拙稿参照。なお管見では、「胡旋女」の『源氏物語』総体に於ける受容についても、諸注他にこれまで具体的な論究を見いだしていないので、研究情報についてご教示を乞う。多く「新楽府」に言及する『河海抄』にも、「胡旋女」の言及を見ない（神鷹徳治・太田陽介「資料紹介」『河海抄』所引『白氏文集』本文の性質（一）——新楽府』、『白居易研究年報』第七号、二〇〇六年ほか参照）。

*引用に際し、旧字・繁体字・簡体字等を通行の字体に改め、返り点や句読点を補い、また削除や変更などした部分がある。

付記 本稿は、大阪大学古代中世文学研究会第二〇〇回記念例会（二〇〇八年六月二十八日、於大阪大学教育実践センター）における発表「『胡旋女』の寓意——光源氏と清盛と」の前半部を中心に成稿化したものである。